温泉街がリニューアル

長門湯本温泉観光まちづくり事業がいよいよ完成へ

全国温泉地ランキングトップ10入りを目標に、平成28年から取り組んできた「長門湯本温泉観光まちづくり」が、3月にいよいよ完成します。行政、民間事業者、地域住民が一体となって公民連携で取り組んできた温泉街の再生プロジェクトについて、概要を紹介します。

市長あいさつ

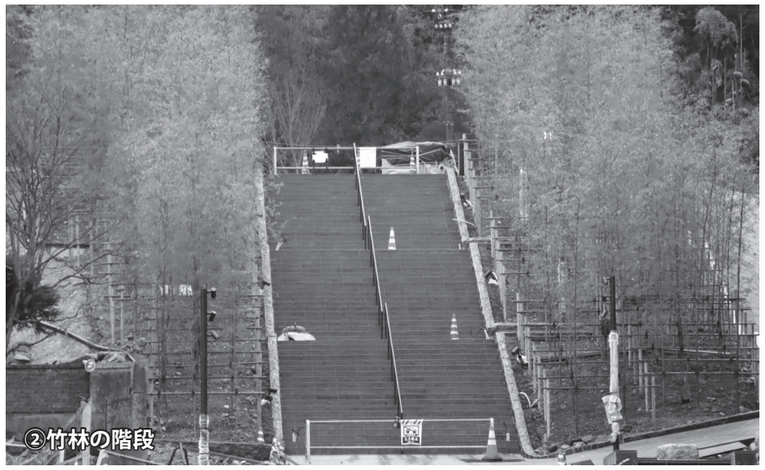
平成28年から取り組んできた「長門湯本温泉観光まちづくり」の整備がいよいよ完成します。

長門湯本温泉は600年の歴史を持つ県内有数の温泉地で、本市の観光産業を支える重要な基盤でもあります。この温泉街再生に向けたプロジェクトには、行政のみでなく、地域住民や外部専門家、民間事業者が参画し、一つの目標に向かって力を合わせて取り組んできました。

今年3月でハード整備は概ね完了しますが、観光まちづくりはこれからがスタートだと考えています。今後は観光まちづくりを地域主体で進めていけるように体制を整え、民間事業者や地域の皆さまとともに、観光地を経営するという視点で、情報発信や景観づくりに取り組み、ソフト事業を充実させながら温泉街の魅力を向上させてまいります。

観光の起爆剤として、交流人口・宿泊客のさらなる増加を目指し、地域の皆さまとしっかり意見を交わしながら、今後も取り組んでまいります。

①メインエリア


②竹林の階段

③恩湯等施設

④界 長門

⑤飛び石

⑥リノベーション物件

ハード整備が続々と完了

①メインエリア

温泉街のメインエリアとなる恩湯広場周辺は、外湯やレストランが整備されるほか、芝生広場や雁木広場を活用したイベントなどが開催され、賑わいを創出する空間となります。

②竹林の階段

駐車場から続く竹林の階段は、非日常の空間へ導きます。階段の両脇には竹林を整備し、夜間はライトアップすることで、温泉街に誘導するメインの動線です。階段途中には礼湯泉源の歴史を後世に伝える礼湯泉源広場を整備しています。

③恩湯・飲食施設

立ち寄り湯となる「恩湯」と飲食施設となる「恩湯食」は、3月18日(水)に開業します。

「恩湯」は岩盤から湧出するお湯を眺めながら入る、深さ1mの浴槽が特徴で、「恩湯食」は温まった体を優しく整えるヘルシーな食を提供します。

二つの建物をつなぐ恩湯広場や音信川に浮かぶ「おとずれ川テラス」を活用したさまざまなイベント開催など、温泉街に新しい魅力を提供していきます。

■恩湯ホームページ
https://onto.jp/

④界 長門

星野リゾートが運営する高級旅館「界 長門」は3月12日(木)に開業します。江戸時代、歴代の藩主がたびたび湯治に訪れていた歴史をもとに、本陣としても使われた御茶屋屋敷のイメージと、現代のデザインを融合させた造りが特徴です。

■界 長門ホームページ
https://kai-ryokan.jp/nagato/

⑤飛び石

音信川の各所に飛び石を配置し、川の魅力を楽しむとともに回遊性を高めることで、そぞろ歩きが楽しめる温泉街を形成しています。

⑥リノベーション物件

温泉街にあり、使われていなかった空き家がリノベーションされ、カフェやバー、土産物販売店、シェアハウスとして生まれ変わります。

全国温泉地ランキングトップ10入りを目指して

～長門湯本温泉観光まちづくり、これまでの取り組み～

温泉街の危機にまちが立ち上がる

長門湯本温泉は約600年の歴史を持つ県内でも有数の温泉地ですが、近年は旅行形態の変化に対応できず、宿泊客数がピーク時の半分以下となるなど、低迷を続けていました。

そうした中、約150年続いた老舗旅館が廃業。温泉街の中心に東京ドーム1個分の巨大な遊休地が広がり、廃旅館などをこのまま放置すれば市全体のイメージ悪化につながる恐れがありました。そこで市が土地を取得し、建物を解体、更地にして、温泉旅館の誘致と跡地利用を含めた温泉街全体の再生プランに取り組むこととなりました。

星野リゾートを誘致、マスタープランを描く

旅館の誘致については、国内外で高級温泉旅館を運営する「星野リゾート」を市長自らトップセールスで誘致し、進出が決定。また、温泉街全体の再生について、星野リゾートと協働でマスタープランを策定。行政、星野リゾート、住民、地元事業者の公民連携により再生事業に取り組むこととなりました。

全国温泉地ランキングトップ10入りを目指す

全国温泉地ランキングトップ10入りを目標に、外湯や食べ歩き、たたずむ空間、文化体験など魅力的な温泉街が持つ6つの要素を戦略的に整備することで、《そぞろ歩きが楽しめる温泉街》を実現するため、平成28年8月にマスタープランを基に「長門湯本温泉観光まちづくり計画」を市が策定しました。

この計画を着実に進めていくための意思決定機関として、地域住民や旅館関係者、星野リゾートや行政で構成する長門湯本温泉観光まちづくり推進会議、外部専門家が参加して具体的な取り組みを検討するデザイン会議により、観光まちづくり計画の具現化に向けた体制整備を図ってきました。

社会実験を繰り返し、温泉街の未来を体感

《そぞろ歩きが楽しめる温泉街》を具現化するために、将来のあるべき姿を期間限定で実現させ、課題などを検証する「社会実験」という手法が取られました。賑わいの創出や道路・河川などの公共空間の活用、夜間景観の演出などについて、「社会実験」を繰り返してその課題や効果を検証し、改善しながら検討を重ねてきました。

また、温泉街の賑わい検証を目的に開催された「おとずれリバーフェスタ」では、温泉街の中心を流れる音信川の地形を活用した演出や出店、ワークショップが行われ、若い世代を中心に市内外から多くの人が訪れ、将来の温泉街の姿を楽しみました。

景観や交通のルールを地域と協議を重ねる

魅力的な温泉街を形成するために必要な景観や交通のルールについて、地域住民とワークショップを開催。長門湯本温泉らしい景観の概念や地域で守るべきルール、《そぞろ歩き》ができる温泉街の実現に向けた交通のあり方について、ワークショップの中で何度も協議を重ね、合意形成してきました。

平成31年4月には長門市景観計画、長門市景観条例が施行され、長門湯本地区は「景観形成重点地区」として、景観ガイドラインに沿った景観づくりを行うことで、温泉街の魅力を維持、向上させていきます。

「恩湯」の運営を民設民営で

長門湯本温泉観光まちづくりの大きな特徴として、行政だけでなく星野リゾート、住民、地元事業者が一体となって進める「公民連携」の取り組みが挙げられます。

長年地元に愛されてきた市営公衆浴場「恩湯」は、築後40年以上経過し、全体が老朽化していたほか、赤字経営が続き、継続的な運営が困難となっていました。そこで長門湯本温泉観光まちづくり推進会議では「恩湯」の建て替えを決定。建設、運営については「民設民営」で行うこととなりました。

入浴施設「恩湯」や飲食施設などの運営事業者を公募した結果、地元の若手経営者らが設立した長門湯守株式会社に決定し、建設、運営を行うこととなりました。

また、「恩湯」建て替えに重要な泉源について、これまで位置や構造が明らかでなかったことから建て替えを機に、泉源調査が実施されました。その結果、岩盤から温泉が湧き出る全国的にも珍しい温泉ということが判明。新しい「恩湯」では、この岩盤湧出の魅力を最大限に生かした施設整備が行われることとなりました。

▲ワークショップで議論

▲音信川を活かした開放的な空間を楽しむ

▲推進会議で事業の進捗を確認

▲進出協定を締結

▲軒先に提灯を掲げ、夜間景観を演出

▲公共空間の使いこなしが魅力向上の鍵

▲温泉街に 20 年ぶりに新規出店

▲恩湯は民設民営で

温泉街に新たな魅力 ギャラリーカフェ開業

観光まちづくり計画を進めていく上で、行政のみが取り組むのではなく、住民や民間事業者がいかに主体的に参画していくかが大きな課題でした。

そうした中、旅館の若手経営者や萩焼の若手作家など地元の若者たちが温泉街に新たな魅力を生み出そうと、会社を立ち上げ、古民家を自分たちの手でリノベーションし、萩焼深川窯の作品に触れることができるギャラリーカフェを開業。温泉街では20年ぶりに新しい店舗が生まれました。

この取り組みをきっかけに、温泉街にある店舗の外観の変更や新規事業の立ち上げ、空き家をリノベーションしたシェアハウスやバーなどの創業につながりました。

川床や置き座など公共空間を使いこなす

長門湯本温泉では、河川や道路といった公共空間を地域の中庭と捉え、観光客と地域住民が交流する魅力的な場所として、使いこなす仕組みづくりにも取り組んできました。

社会実験を通して、川床やベンチ、屋台などを河川や道路空間に設置し、公共空間の活用方法や安全な運用方法について検証を行いました。

その結果、音信川および大寧寺川の一帯が、河川敷地占用許可準則に基づく都市・地域再生等利用区域に県内で初めて指定されました。

これにより、占用許可を受けた事業者による河川敷地の占用が可能となり、地元の民間事業者で構成される「長門湯本オソト活用協議会」が占用主体となって、川床などの利活用が行われています。

夜間景観をデザインし温泉街のあかりを演出

風情ある温泉街の魅力のひとつに「夜間景観」の演出があります。

社会実験の中で、音信川にかかる橋や護岸、路地の石積みなど地域の資源に光をあてて魅力を上げる取り組みや、住宅や商店の軒先に長門湯本温泉をデザインした「湯本提灯」を設置し、夜間景観を演出する取り組みが行われました。

また、温泉街全体で照明などを自動制御するなどスマートシティの実証実験としての取り組みも進められています。

入湯税を財源に温泉街の価値を高める

将来にわたって温泉街の価値を高め、観光客の満足度を上げていくために、温泉街を一つの会社ととらえ、観光地の経営を行うエリアマネジメントの仕組みが協議され、今年4月からエリアマネジメント法人がスタートします。

このエリアマネジメント法人は、地域の民間組織による株式会社として設立され、エリア価値を高める公益性の高い事業や景観インフラの維持について、入湯税を財源として事業を実施します。

この法人設立にあわせ、今年の4月1日から長門湯本温泉の入湯税を150円から300円に引き上げます。

長門湯本温泉への期待

星野リゾート代表
星野 佳路 氏

日本観光が劇的な転換点を迎えている。世界的な外国旅行ブームを背景に、訪日外国人市場が急成長してきたことは事実であるが、国内観光消費額の約80％は日本人による日本国内観光であり、日本人市場の重要性は当面変わらない。

しかし、成長セグメントはインバウンドであり、国内観光地の正しい戦略は、日本人をしっかりと集客しながら、インバウンドマーケティングを展開し成長セグメントを取り込むという両睨み戦略となる。

日本観光における不都合な真実は、20兆円を超える日本人による日本国内観光が減少に転じようとしていることだ。それがすでに時々起こっており、日本人観光消費額の減少幅がインバウンド消費増加額を相殺し、全体の観光市場規模が減少した年が過去10年で2度起きている。

私は、２０２５年以降、団塊の世代が後期高齢者になり旅行参加率が落ちてくると、この現象がより頻繁に起こる可能性があると考えている。つまり、これからの観光地は自然増に期待できる状況ではなく、世界に自ら出て行って、自分の市場を獲得する知恵とエネルギーを持たなければ生き残れない。

そのための大きな一手が「長門湯本温泉観光まちづくり計画」だ。団体旅行から個人旅行へ、国内中心からインバウンド両睨みへ、入込数主義から質重視の時代へ、世界で起きている観光産業の大きなトレンドを先取りし、持続可能な新しい観光産業のあり方を目指す取り組みだ。だから今、全国の観光地が長門湯本温泉に注目している。

この劇的な市場変化の時代は、長門湯本温泉にとって有利だ。変化がない時は、今まで強かった観光地が強くあり続ける構造が継続するということでもある。

温泉地で言えば、箱根、熱海、登別、湯布院、有馬などなどだ。他の産業においても市場シェアの逆転が起こるのは大きな環境変化が起こった時であり、それは強いブランドは変化対応が遅れる傾向があるからだ。観光地ではハードとソフト両面の適応を、地域の参加者が一致団結して実行する必要があり難易度が高い。

長門湯本温泉には、日本観光の新しい時代の成功事例になるチャンスがある。それを掴むか掴まないかは、これからの私たち次第だ。頑張ろう。

湯本温泉旅館組合理事長
伊藤 就一 氏

平成28年に長門湯本温泉観光まちづくり計画が策定されてからはや3年。その間、大河ドラマなど少し追い風的な要素もありましたが、ここ近年の県内の観光情勢は厳しく、宿泊客数も減少傾向となっています。

観光まちづくりのハード整備は完成しますが、今からがスタートラインと思っています。これから長門湯本温泉として成長していくための取り組みを行っていかないといけません。「おもてなし」の姿はどうあるべきか、市民の方がどう生活を楽しむかを合わせて発信することが重要と思います。私たちの使命はお客さまにいかに楽しんでいただき、その環境を維持するかが一番重要ですので、その志を変えずにまちづくりを進めていきたいと思います。

お客さまには魅力的な温泉街の6つの要素、絵になる場所で写真を撮る、川床や雁木広場などでたたずむ、食や買い物などを楽しむなど、そぞろ歩きを楽しんでもらえれば嬉しいです。

長門湯本温泉のシンボルでもあり、地元からも長年愛されてきた「恩湯」も新しく生まれ変わります。岩盤から自然湧出する珍しい温泉を眺めながら入浴することができ、ここを起点にそぞろ歩きしてもらうことを期待しています。

大寧寺住職
岩田 啓靖 氏

長門湯本温泉は「神授の霊湯」として、応永年間から600年に及ぶ歴史を紡いできました。

神話と伝承がないまぜになった独特な存在感を持つ秘湯です。大寧寺による仏天の加護と長門一の宮住吉明神の神助があいまって、来湯する善男善女の福祉を増崇すると信じられてきました。

江戸時代には、萩藩主の公式な湯治場として栄え、幕末期の年商総額はおよそ銀七貫に及んだとの記録も残っています。

今、長門湯本温泉はまちぐるみで新しい装いを整え、「神授の湯」の復活を目指して再出発を果たそうとしています。

行政の呼びかける産業政策の推進を、地域の住民や事業者らが参画し、伝統的な神仏の加護が後押しする風景は、ほかではなかなか見られない珍しいニュースだと思っています。

長門湯本温泉観光まちづくりの成功を確信しています。

湯本まちづくり協議会
会長 荒川 武美 氏

短期的には観光客が多く来てもらえることを、10年20年先には若い人たちが帰って来たいと思える温泉街になることを期待しています。観光まちづくりをきっかけに地元の3つの自治会がまとまり、一つの目標に向かって取り組んでいるのでこれを続けていきたいと思います。

長門市観光コンベンション協会事務局長
南野 佳子 氏

日経トレンディが発表する2020ヒット予測100で、長門湯本温泉が第30位にランクイン。この期待を上回る質の高いおもてなしが求められます。新しい力と地元の結集で質の高い観光ビジネスの展開に期待しています。

長門湯本温泉のこれから

「長門湯本温泉観光まちづくり」は、全国にもまれにみるさまざまな仕組みが導入され、今日を迎えました。

長門湯本温泉は、県内でも有数の観光地であり、また、市民の生活と一体となった街です。星野リゾートによるマスタープランの策定や、2年間にわたる社会実験、地元に愛された恩湯の建て替えなど、行政のみならず、地域の住民や事業者の方々との協働により取り組みが進められてきました。

観光まちづくり計画の目標は「全国温泉地ランキングＴＯＰ10入り」です。この目標を実現するためには観光客が満足するだけでなく、この長門湯本温泉で働く人や暮らす人も満足できることが重要であり、さまざまなハード整備が完了し、継続的に温泉街の価値を高めるための仕組みなどができた、これからが本当の「観光まちづくり」のスタートです。

地域が主体的に活動し、観光地を一体的に経営するための基盤はできあがりました。今後、観光客の増加が期待されますが、その際には新たな課題が浮き彫りになるかもしれません。これまでの取り組みを活かし、長門湯本温泉が全国に誇れる温泉街となるためには、引き続き、地域住民や事業者と行政が力を合わせていくことが不可欠です。

よりよいまちづくりに向けて、まずは温泉街に足を運んでみてはいかがでしょうか。

■問い合わせ
成長戦略推進課
TEL 23-1234